

2022年2月13日 教会報第656号 卷頭言

## 新たな日常へ～脱成長、脱人間、脱西欧、脱宗教

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

### 「コロナ禍の終息を願って

主イエス・キリストよ、あなたは、隣人を愛し、助けを必要とする人に手を差し伸べ、あなたご自身だと思ってそれを行うように教えられました。不安のうちにあるこの時、恐れている人を慰める力、病人の世話をする力、孤独の中にある人に、わたしたちとあなたの愛を確信する力をお与えください。主のみ名によってお願ひいたします。アーメン」

毎週木曜集会の最後に、参加者一同でこの祈りを獻げています。もしよろしければ皆さんも日々の祈祷の中でこの祈りをお使いくださいますようにお願いします。

さて、コロナウイルス感染症によるパンデミックが始まって3年目を迎える。海に向こうにある国への里帰りも、家族や親戚との再会も2年以上出来ないでいます。日本の水際対策の緩和を待ち続けていますが、今のところすぐに実現する見込みはありません。

そういう中で、世界中を見てもいつ終わるか未だに見込みのないこの恐ろしい現状について、どのように理解したら良いのか、私なりに模索し続けています。

私は最近知人より「コロナウイルス、人類に問いかける」という本をいただきました。著者は、神学者で、国際気候宗教市民ネットワーク（ICE）の常任代表を務めている方です。この本から、いくつか重要なメッセージを紹介したいと思います。

- ・自分の生存のため変異を繰り返しているウイルスを、私たち人類がワクチンを持って絶滅させることは出来ないのではないか、慎重かつ悲観的な未来が予測される。
- ・人類がやむを得ずコロナとの共存を選択して、いわゆる「コロナウイズ」という未曾有の事態が展開されるようだが、それがどのような結果をもたらすか不確かである。
- ・もはや人類がコロナ以前の日常を回復することを、目標にすることはあるまい。
- ・「Covid19」は、気候変動と生態系の崩壊をもたらした現在の人類文明の必然的結果である。世界の経済的、社会的不平等を生み出した資本主義の開発論理で犠牲を強いられてきた自然を回復することが、喫緊の課題である。
- ・従来のような、欲望をもとにする資本主義的な生産・消費体制は居住不可能な地球に決着されるだろう。
- ・文明批評家のジェレミー・リフキンが指摘しているように、地政学的な政治ではなく生命権政治を始めなければならない。
- ・キリスト教教会の信仰が、成長を至高の価値として捉え、資本主義のエトスを維持・存続・拡大する理念に変質したことから変革されなければならない。
- ・暫定的な結論として、脱成長主義、脱人間中心、脱西欧中心、脱宗教中毒が求められる。

以上のような問題意識と文明論的な警告を聞きながら、私は再び聖書の言葉に耳を傾けます。「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べれば、取るに足りない」とわたしは思います。被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隸属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」

(ローマの信徒への手紙 8：18～22)

すでに使徒パウロが指摘したように、被造物のうめき声に耳を傾けるべきである。弓折れ矢尽く前に、コロナウイルスを悪魔的な存在とだけとらえるのではなく、むしろ文明の矯正者として認め、ノアの洪水以降の新しい道＝ニューノーマルを求める神様の呼びかけに捉え、また、イエス様が宣布された新しい命への道を探るきっかけすべきであろう。